

23) 野崎功雄, 久保義郎, 他: 噴門側胃切除術に空腸間置再建を行った胃がん107症例の長期成績. 第41回胃外科術後障害研究会. (23年10月 大阪)

24) 羽藤慎二, 久保義郎, 他: 幽門狭窄を伴う切除不能胃癌に対するバイパス術のS-1ベースの化学療法に対する意義. 第41回胃外科術後障害研究会. (23年10月 大阪)

25) 今井智大, 久保義郎, 他: 食道癌に併存した脾動脈瘤に対し脾動脈血紮と脾摘を行った1例. 第72回日本臨床外科学会総会(平成23年11月 横浜)

26) 羽藤慎二, 久保義郎, 他: No.14vリンパ節郭清はD2に含めるべきか. 第73回日本臨床外科学会総会. (23年11月 東京)

27) 河本宏昭, 久保義郎, 他: 十二指腸へ逸脱した巨大胃脂肪腫の1例. 第73回日本臨床外科学会総会. (23年11月 東京)

28) 平野豊, 久保義郎, 他: 後腹膜 solitary fibrous tumor の1例. 第73回日本臨床外科学会総会. (23年11月 東京)

29) 野崎功雄, 久保義郎, 他: Gambee 縫合による食道胃管端側吻合. 第73回日本臨床外科学会総会. (23年11月 東京)

30) 大田耕司, 久保義郎, 他: 当院における膝癌術後補助療法の実績. 第73回日本臨床外科学会総会. (23年11月 東京)

31) 槇殿公誉, 久保義郎, 他: 小児GISTの1例. 第73回日本臨床外科学会総会. (23年11月 東京)

32) 栗田啓, 久保義郎, 他: 外科手術の安全とエコー対策(回復により胃切除術). 第73回日本臨

床外科学会総会. (23年11月 東京)

33) 小島誉也, 久保義郎, 他: 血清CEA上昇を認め、FDG集積を伴う腺癌を合併した仙骨前 Tailgut Cyst の1例. 第73回日本臨床外科学会総会. (23年11月 東京)

34) 羽藤慎二, 久保義郎, 他: 胃癌に対する審査腹腔鏡検査による腹膜播種診断における問題点. 第24回日本内視鏡外科学会総会. (23年12月 大阪)

35) 小島誉也, 久保義郎, 他: 80歳以上の高齢者における腹腔鏡下大腸切除術に関する検討. 第24回日本内視鏡外科学会総会. (23年12月 大阪)

G. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）

研究分担者 報告書

国内外科手術成績を基礎とした経口抗がん剤による治癒切除大腸癌術後補助療法の確立

分担研究者 北野 正剛 大分大学 学長

研究要旨：大腸がんにおける再発高危険群同定のため、大腸がんの手術切除凍結検体24例をリンパ節転移の有無により2群に分け、マイクロアレイ解析により、リンパ節転移と関連のある遺伝子を同定した。さらに同定された遺伝子群の発現についてRT-PCRと免疫組織化学法にて検証した。リンパ節転移と関連する遺伝子24個が同定された。その中でリンパ節転移陰性群と比べ陽性群でmRNAの発現が有意に高かったVSNL-1に着目した。2001～2005年に当科で手術を施行した大腸がん症例143例の原発巣のホルマリン固定標本を用いてVSNL-1抗体にて免疫組織化学法を行い、VSNL-1蛋白の発現と病理組織学的因子および予後との関連について検討した。VSNL-1高発現群は、stageIIではリンパ管侵襲と、stageIIIではリンパ節転移個数と相関を認めた。また stageIIIにおいてVSNL-1高発現群は、低発現群と比べ、有意に低い全生存率を示した。予後因子を明らかにするため、stageIIとstageIII両方を含む143例を用いて、多変量解析を行ったところ、VSNL-1発現が、全生存率に関する独立予後因子であることが判明した。VSNL-1高発現のstageIIに対しては、stageIII同様に補助化学療法を施行することにより予後改善の可能性はある。

A. 研究目的

本班研究では、これまで大腸がん術後の再発高危険群としてStageIII大腸がんに対して、術後補助化学療法における経口抗がん剤と点滴静注抗がん剤の臨床的有用性の第III相試験を行ってきた（JCOG0205）。一方、StageII大腸がんにおける再発高危険群は未だ明らかにされていない。今回大腸がんにおけるリンパ節転移の予測因子となる遺伝子を同定し、予後との関連を明らかにすることにより、StageII大腸がんにおいて術後補助化学療法の適応となりうる再発高危険因子を明らかにする。

B. 研究方法

大腸がんの手術切除凍結検体24例をリンパ節転

移の有無により2群に分け、マイクロアレイ解析により、リンパ節転移と関連のある遺伝子を同定した。さらに同定された遺伝子群の発現について同検体を用いてRT-PCRにて検証した。それらの中でリンパ節転移との関連が示唆されたVisinin-like protein-1 (VSNL-1) 遺伝子の産物を免疫組織化学法にて検討した。次に2001～2005年に当科で手術を施行した大腸がん症例143例の原発巣のホルマリン固定標本を用いてVSNL-1抗体にて免疫組織化学法を行い、VSNL-1蛋白の発現と病理組織学的因子および予後との関連について検討した。

倫理面への配慮；

ヘルシンキ宣言などの国際的倫理原則に従い遵守する。データの取り扱い上、患者氏名等直接個

人が識別できる情報を用いず、かつデータベースのセキュリティを確保し、個人情報（プライバシー）保護を厳守する。インフォームド・コンセントについて説明ののち文書にて同意を取得する。

C. 研究結果

マイクロアレイ解析により、リンパ節転移と関連する遺伝子 24 個が同定された。その中でリンパ節転移陰性群と比べ陽性群で mRNA の発現が有意に高かった VSNL-1 に着目した。24 例の切除標本を用いた免疫組織化学法において、VSNL-1 蛋白は、リンパ節転移陽性群で高頻度に濃染され、その染色部位はがん細胞の細胞質であった。次に、大腸がん 143 症例における VSNL-1 発現と臨床病理学的因子ならびに予後との関連について検討した。VSNL-1 高発現群は、stageII ではリンパ管侵襲と、stageIII ではリンパ節転移個数と相関を認めた。また stageIII において VSNL-1 高発現群は、低発現群と比べ、有意に低い全生存率を示した。予後因子を明らかにするため、stageII と stageIII 両方を含む 143 例を用いて、多変量解析を行ったところ、VSNL-1 発現が、全生存率に関する独立予後因子であることが判明した。

D. 考察

現在、リンパ節転移陽性大腸がんに対する術後補助化学療法のわが国の標準治療法は、5Fu+1LV 点滴静注療法である。しかし、JCOG0205 の臨床試験の結果、UFT+1LV 経口抗がん剤の有用性が検証された場合、これまでわが国におけるエビデンスがないままに広く普及してきた経口抗がん剤による術後補助療法の妥当性を示すことができ、さらに来院頻度が少なくてすむ、静脈確保による苦痛がない、点滴時間の拘束が不要などという経口剤のメリットを有する標準治療を確立すること

ができる。一方、リンパ節転移陰性大腸がん

(stageII) においても約 15-20% の患者が再発をきたしており、再発高危険群を同定し術後補助化学療法行えば治療成績の向上が期待できる。今回の研究より当施設の stage II および III 大腸がん患者 143 例の予後因子の検討を行なったところ、多変量解析にて VSNL-1 高発現が有意な独立因子であることが示された。VSNL-1 高発現の stageII に対しては、stageIII 同様に補助化学療法を施行することにより予後改善の可能性はある。

E. 結論

VSNL-1 高発現の stageII に対しては、stageIII 同様に補助化学療法を施行することにより予後改善の可能性はある。

F. 研究発表

1. 論文発表

(1) Akagi T, Inomata M, Kitano S, et al. Visinin-like protein-1 overexpression is an indicator of lymph node metastasis and poor prognosis in colorectal cancer patients. Int J Cancer (in press)

(2) Hiroishi K, Inomata M, Kitano S, et al. Cancer stem cell-related factors are associated with the efficacy of pre-operative chemoradiotherapy for locally advanced rectal cancer. Experimental and Therapeutic Medicine. 2011 2:465-470

(3) Kono Y, Inomata M, Kitano S, et al. Antiproliferative effects of a new α -lipoic acid derivative, DHL-HisZnNa, in HT29 human colon cancer cells in vitro. Expert Opinion On Therapeutic Targets. (in press)

2. 学会発表

(1) Yohei Kono, Masafumi Inomata,

Takahiro Hiratsuka, Kazumi Ogata,

Seigo Kitano.

Effects of New α -lipoic Acid Derivative,

DHL-HisZn, on Cancer Cell Growth in HT29 Human

Colon Cancer Cells.

OOTR 7th Annual Conference, May 13-14, 2011,

Hong Kong.

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）

研究分担者 報告書

国内外科手術成績を基礎とした経口抗がん剤による治癒切除大腸癌術後補助療法の確立

研究分担者 島田 安博 国立がん研究センター 消化管内科長

研究要旨 2010年3月から Stage III大腸がんに対する術後補助化学療法の有用性検証を目的として、JCOG0910 試験を開始した。また、先行の JCOG0205 試験は 2011年11月の最終追跡の結果非劣性が検証された。さらに無再発生存割合や全生存割合は、海外の報告と比較して良好である。また、研究事務局として施設入替などによる症例登録推進のために独自の工夫を行った。

A. 研究目的

約3割の再発率が報告されている Stage III大腸がんに対する術後補助化学療法の標準治療法を大規模 RCT で確立することを目指す。手術成績や再発に関するフォローアップが海外と異なる国内医療環境における標準治療確立を目的とした研究である。

B. 研究方法

先行する JCOG0205 試験(5FU+1-LV 対 UFT+LV) は登録終了し、すでに予定の抗がん剤治療も投与が終わっている。現在追跡調査にて、再発、生存、二次がん発生などについて検討をしている。新規試験である JCOG0910 (CAPS) 試験を検討し、研究計画書を作成し、2011年3月から症例登録を開始した。

倫理面への配慮；

参加患者の安全性確保については、適格条件やプロトコール治療の中止変更規準を厳しく設けており、試験参加による不利益は最小化される。また、ヘルシンキ宣言などの国際的倫理原則に従い遵守する。データの取り扱い上、患者氏名等直接

個人が識別できる情報を用いず、かつデータベースのセキュリティを確保し、個人情報（プライバシー）保護を厳守する。

C. 研究結果

1) JCOG0205 試験

主評価項目である無再発生存割合や全生存割合は、モニタリングレポートにより定期的に報告され、その内容は研究代表者の報告に記述されている。今回の成績は海外での同様の治療成績と比較してもいずれも良好である。特に再発後の抗がん剤治療や転移切除により、再発から死亡までの期間が大幅に延長した事実が報告されている。また、二次がんの頻度は追跡期間が長くなるに従い増加しており、背景としてがん罹患率の上昇が影響していると推定される。

2) JCOG0910 試験

研究計画書を作成し、JCOG 臨床試験審査委員会、施設 IRB 承認を得て、2011年3月から症例登録を開始した。概略を以下に示す。

目的：

Stage IIIの結腸癌(C, A, T, D, S)、直腸S状部癌、直腸癌(Raのみ)治癒切除(R0)患者を対象として、

経口抗癌剤 S-1 療法の術後補助化学療法としての臨床的有用性を、国際的標準治療である capecitabine 療法とランダム化比較して、無病生存期間において非劣性であることを検証する。

Primary endpoint : 無病生存期間 (Disease-free survival)、Secondary endpoints : 全生存期間 (Overall survival)、有害事象発生割合

試験の科学的根拠は、X-ACT での Capecitabine の標準治療としての位置づけ、胃癌 ACTS-GC での術後補助療法としての意義を考慮し、経口抗がん剤による最適な術後補助療法レジメンを確立することを目指す。

対象 :

- 1) 手術標本の病理組織学的診断により大腸腺癌と診断されている。
- 2) 手術所見および切除標本所見による主占居部位が盲腸から上部直腸 (C. A. T. D. S. RS. Ra) と診断されている。
- 3) 大腸癌取扱い規約 (第 7 版) にて組織学的病期が Stage III である。
- 4) 組織学的壁深達度が pMP 以深の同時性大腸多発癌がない。
- 5) D2 あるいは D3 の系統的リンパ節郭清を含む大腸切除術が行われた。
- 6) 大腸切除術において R0 切除がなされている。
- 7) 登録日の年齢が 20 歳以上 80 歳以下。ある。
- 8) PS (ECOG) : 0、1。
- 9) 他のがん種に対する治療も含めて化学療法、放射線照射、いずれの既往もない。
- 10) 通常食の経口摂取が可能であり経口薬の内服ができる。
- 11) 術後 8 週以内に術後補助化学療法が開始できる。
- 12) 重要臓器機能が十分保持されている。

13) 本試験参加について、本人からの文書による同意が得られている。

治療 :

A 群 (Capecitabine 群)

1 日 capecitabine 2,500 mg/m² を 14 日間連日経口投与した後、7 日間の休薬期間を設ける。1 日量の capecitabine を朝食後と夕食後 30 分以内の 2 回に分けて内服する (1 コース=3 週間)。計 8 コースの投与を行う。

B 群 (S-1 群)

1 日 S-1 80 mg/m² を 28 日間連日経口投与した後、14 日間の休薬期間を設ける。1 日量の S-1 を朝食後と夕食後の 2 回に分けて内服する (1 コース=6 週間)。計 4 コースの投与を行う。

予定登録数と研究期間 :

予定登録患者数 : 1,550 名。

登録期間 : 3 年

追跡期間 : 登録終了後 6 年

総研究期間 : 9 年

国立がん研究センター中央病院では、2012 年 3 月末で 82 例、平成 23 年度 38 例の登録を実施し、特に問題となる有害事象の報告はない。

3) 研究事務局としての活動

大腸がんグループは 2001 年創設時には 33 施設から活動を開始した。2003 年 10 月の 0404 試験開始時に 13 施設の特別施設追加のあとは、JCOG ポリシーに従い、全施設からの症例登録確認後に 3 ヶ月毎に 2 施設の追加という原則で施設追加を実施してきた。しかしながら、試験終了後から新試験開始までの間に研究者の異動などもあり、症例登録が低下する傾向が認められた。このため 2011

年1月から継続的に新規施設の参加や施設入れ替えを実施した。その結果、2012年3月末で新規10施設から56症例の登録を実現することができ、年間460例の12%の貢献となった。平成23年12月のJCOG総合班会議において、グループ運営の実際について講演を行い他グループへの情報提供を行った。

D. 考察

リンパ節転移陽性大腸がんに対する術後補助化学療法のが国の標準治療法は、5Fu+1-LV点滴静注療法である。JCOG0205の臨床試験の結果、UFT+LV経口抗がん剤のDFSにおける非劣性が検証されたことから、経口抗がん剤による術後補助療法が代替可能であることを示すことができた。来院頻度が少なくすむ、静脈確保による苦痛がない、点滴時間の拘束が不要などという経口剤のメリットを有する標準治療を確立することができた。

一方、抗がん剤薬価の高騰により、最近では医療費を含めた標準治療の確立を検討する必要性が発生している。特に患者数の急激な増加をみている大腸癌においては重要な視点と考える。JCOG0910試験では、臨床現場での受容可能性、医療費を含めて、国内の優れた外科手術に追加すべき術後補助療法を検討することを目的とした。さらに、JCOG0205、JCOG0910試験他の国内大規模RCT成績から、再発高危険群の絞り込みを行い、oxaliplatin併用療法の治療対象を再度検討したい。その前段階として、経口抗がん剤の最適な薬剤を選出すべく、継続的なRCTを実施することにした。

臨床試験グループにおける症例登録数の推進は大きな課題であるが、研究事務局として頻繁で有意義な情報交換により研究者の興味と協力体

制を継続することができた。

E. 結論

Stage III大腸癌における術後補助療法の確立のために、JCOG0205、JCOG0910試験を計画実施し、0205試験においてUFT/LVがDFSで非劣性であることが確定した。国内医療環境、医療費を考慮したRCTを計画実行することにより、国内において最適な治療レジメンを確立することを目指す。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Hirashima Y, Yamada Y, Tateishi U, Kato K, Miyake M, Horita Y, Akiyoshi K, Takashima A, Okita N, Takahari D, Nakajima T, Hamaguchi T, Shimada Y, Shirao K. Pharmacokinetic parameters from 3-Tesla DCE-MRI as surrogate biomarkers of antitumor effects of bevacizumab plus FOLFIRI in colorectal cancer with liver metastasis. *Int J Cancer*. 2012, 130(10):2359-65.
2. Hori N, Iwasa S, Hashimoto H, Yanai T, Kato K, Hamaguchi T, Yamada Y, Murakoshi K, Yokote N, Yamamoto H, Shimada Y. Reasons for avoidance of bevacizumab with first-line FOLFOX for advanced colorectal cancer. *Int J Clin Oncol*. 2012 Mar 14. [Epub ahead of print]
3. Yoshino T, Yamazaki K, Hamaguchi T, Shimada Y, Kato K, Yasui H, Boku N, Lechuga MJ, Hirohashi T, Shibata A, Hashigaki S, Li Y, Ohtsu A. Phase I study of sunitinib plus modified FOLFOX6 in Japanese patients with

- treatment-naive colorectal cancer. *Anticancer Res.* 2012, 32(3):973-9.
4. Sugihara K, Ohtsu A, Shimada Y, Mizunuma N, Lee PH, de Gramont A, Goldberg RM, Rothenberg ML, Andre T, Brienza S, Gomi K. Safety analysis of FOLFOX4 treatment in colorectal cancer patients: a comparison between two asian studies and four western studies. *Clin Colorectal Cancer.* 2012, 11:127-137.
 5. Watanabe T, Itabashi M, Shimada Y, Tanaka S, Ito Y, Ajioka Y, Hamaguchi T, Hyodo I, Igarashi M, Ishida H, Ishiguro M, Kanemitsu Y, Kokudo N, Muro K, Ochiai A, Oguchi M, Ohkura Y, Saito Y, Sakai Y, Ueno H, Yoshino T, Fujimori T, Koinuma N, Morita T, Nishimura G, Sakata Y, Takahashi K, Takiuchi H, Tsuruta O, Yamaguchi T, Yoshida M, Yamaguchi N, Kotake K, Sugihara K; Japanese Society for Cancer of the Colon and Rectum. Japanese Society for Cancer of the Colon and Rectum (JSCCR) guidelines 2010 for the treatment of colorectal cancer. *Int J Clin Oncol.* 2012, 17(1):1-29.
 6. Shimada Y. Liver resection for colorectal metastases: Is there an age limit? The Japanese perspective. *Curr Colorectal Cancer Rep.* 2011, 7: 187-190.
 7. Horita Y, Yamada Y, Kato K, Hirashima Y, Akiyoshi K, Nagashima K, Nakajima T, Hamaguchi T, Shimada Y. Phase II clinical trial of second-line FOLFIRI plus bevacizumab for patients with metastatic colorectal cancer: AVASIRI trial. *Int J Clin Oncol.* 2011 Oct 15. [Epub ahead of print]
 8. Yamada Y, Yamaguchi T, Matsumoto H, Ichikawa Y, Goto A, Kato K, Hamaguchi T, Shimada Y. Phase II study of oral S-1 with irinotecan and bevacizumab (SIRB) as first-line therapy for patients with metastatic colorectal cancer. *Invest New Drugs.* 2011 Sep 6. [Epub ahead of print]
 9. Takashima A, Shimada Y, Hamaguchi T, Ito Y, Nakano A, Nakamura K, Shibata T, Fukuda H, Moriya Y; Colorectal Cancer Study Group of the Japan Clinical Oncology Group. A Phase I/II trial of chemoradiotherapy concurrent with S-1 plus mitomycin C in patients with clinical Stage II/III squamous cell carcinoma of anal canal (JCOG0903: SMART-AC). *Jpn J Clin Oncol.* 2011, 41(5):713-7.
 10. Kato K, Inaba Y, Tsuji Y, Esaki T, Yoshioka A, Mizunuma N, Mizuno T, Kusaba H, Fujii H, Muro K, Shimada Y, Shirao K. A multicenter phase-II study of 5-FU, leucovorin and oxaliplatin (FOLFOX6) in patients with pretreated metastatic colorectal cancer. *Jpn J Clin Oncol.* 2011, 41(1):63-8.
- G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）
1. 特許取得 なし
 2. 実用新案登録 なし
 3. その他 なし

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
植竹宏之、 石川敏昭、 <u>杉原健一</u>	大腸癌に対する術後補助化学療法の考え方	瀧内比呂也 企画	うまく続ける消化管がん化学療法	羊土社	東京	2011	143-148
植竹宏之、 <u>杉原健一</u>	大腸癌の術後補助化学療法	大村健二、瀧内比呂也編	消化器癌化学療法改訂3版	南山堂	東京	2011	262-266
<u>斉田芳久</u>	手術療法 大腸	前谷 容・遠藤敏子	select nursing 消化器疾患-疾患の理解	学研	東京	2011	194-200
<u>工藤進英</u>			無痛内視鏡で大腸がんは治せる！	大和書房	東京	2011	
<u>金光幸秀</u> 、 小森康司、 石黒成治	がん患者の周術期管理のすべて外科治療-骨盤内臓全摘.		外科治療	永井書店		2011	109-119

<u>金光幸秀</u> 、 小森康司、 石黒成治	DS NOW吻合術と縫 合術- 骨盤内臓全 摘術		DS NOW	メディカ ルビュー 社		2011	135-148
<u>金光幸秀</u> 、 小森康司、 石黒成治	大腸癌の予後因子 - リンパ節検索個 数の大腸癌予後因 子としての評価.		日本臨 床増刊 号大腸 癌	日本臨床 社		2011	202-21 1
<u>金光幸秀</u> 、 小森康司、 石黒成治	大腸癌における郭 清リンパ節個数の 予後因子としての 意義- 多施設研究		大腸疾 患NOW	日本メデ ィカルセ ンター		2011	83-95
<u>金光幸秀</u> 、 小森康司、 石黒成治	術後サーベイラン スおよび再発に対 する治療		大腸癌 FRONTIE R	メディカ ルビュー 社		2011	28-35

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Shiomi A, Ito M, Saito N, Ohue M, Hirai T, Kubo Y, <u>Moriya Y.</u>	Diverting stoma in rectal cancer surgery. A retrospective study of 329 patients from Japanese cancer centers.	Int J Colorectal Dis	26(1)	79-87	2011
H amaguchi T, Shirao K, <u>Moriya</u> <u>Y</u> , Yoshida S, Kodaira S, Ohashi Y, The NSAS-CC Group.	Final results of randomized trials by the National Surgical Adjuvant Study of Colorectal	Cancer Chemother Pharmacol.	67	587-596	2011
Yamamoto S, Fujita S, Akasu T, Inada R, Takawa M, <u>Moriya Y.</u>	Short-Term outcomes of laparoscopic intersphincteric resection for lower rectal cancer and comparison with open approach.	Digestive Surgery (Dig Surg)	28	404-409	2011
Matsumoto T, Yamamoto S, Fujita S, Akasu T, <u>Moriya</u> <u>Y.</u>	Cecal schwannoma with laparoscopic wedge resection: Report of case.	Asian J Endosc Surg	4	178-180	2011

<u>Moriya Y.</u>	Intersphincteric resection for very low rectal cancer.	R. Schiessel and P. Metzger (eds), Intersphincteric resection of low rectal tumors, Springer New York			In press
石黒成治, 上原圭介, 稲田 涼, 山本聖一郎, 藤田伸, 赤須孝之, <u>森谷 亘皓</u> .	7. 腹会陰式直腸切断術,	特集 はじめての手術手技-どのように教えるか-外科	73	373-378	2011
<u>森谷 亘皓</u> , 島田安博, 濱口哲弥(JCOG 大腸がんグループ 国立がん研究センター中央病院)	大腸癌の外科治療に関するわが国の臨床試験	特集 いま必要な外科治療に関する臨床試験の最新知識, 臨床外科	66	610-616	2011
<u>森谷 亘皓</u> , 赤須孝之, 藤田 伸, 山本聖一郎, 稲田 涼, 高和 正.	6. 下部直腸癌側方リンパ節転移の治療 -JCOG0212 からJCOG XXへ -, 直腸癌治療の最近の動向	日本外科学会雑誌	112 (5)	325-329	2011
Kajiwara Y, Ueno H, Hashiguchi Y, Shinto E, Shimazaki H, Mochizuki H, <u>Hase K.</u>	Expression of l1 cell adhesion molecule and morphologic features at the invasive front of colorectal cancer.	American Journal of Clinical Patholgy 136:138-44, 2011	136	138-144	2011

Kajiwara Y, Ueno H, Hashiguchi Y, Shinto E, Shimazaki H, Mochizuki H, <u>Hase K.</u>	Heterogeneity of metalloproteinase expression in colorectal cancer - relation of molecular findings to basic morphology.	Anticancer Research	31	1567-1576	2011
Hashiguchi Y, <u>Hase K.</u> , Ueno H, Mochizuki H, Shinto E, Yamamoto J.	Optimal margins and lymphadenectomy in colonic cancer surgery	British Journal of Surgery	98	1171-1178	2011
Shinto E, Hashiguchi Y, Ueno H, Kobayashi H, Ishiguro M, Mochizuki H, Yamamoto J, <u>Hase K.</u>	Pretreatment CD133 and cyclooxygenase-2 expression as the predictive markers of the pathological effect of chemoradiotherapy in rectal cancer patients	Diseases of the Colon and Rectum	54	1098-1106	2011
Ueno H, Mochizuki H, Shirouzu K, Kusumi T, Yamada K, Ikegami M, Kawachi H, Kameoka S, Ohkura Y, Masaki T, Kushima R, Takahashi K, Ajioka Y, <u>Hase K.</u> , Ochiai A, Wada R, Iwaya K, Nakamura T, Sugihara K	Actual Status of Distribution and Prognostic Impact of Extramural Discontinuous Cancer Spread in Colorectal Cancer	Journal of Clinical Oncology	29	2550-2556	2011

上野秀樹, 橋口陽二郎, 望月英隆, <u>長谷和生</u>	【次期改訂に向けて～大腸癌治療ガイドラインの問題点と今後の方向性】 「術後サーベイランスおよび再発に対する治療」 コメント 大腸癌術後サーベイランスの標準化 前向きの臨床研究に何が求められるのか.	大腸癌Frontier	4	152-154	2011
内藤善久, 橋口陽二郎, 上野秀樹, 梶原由規, 島崎英幸, 望月英隆, <u>長谷和生</u>	術前短期化学放射線療法および術後補助化学療法により長期生存を得た直腸未分化癌の1例.	癌と化学療法	38	117-120	2011
山本順司, 初瀬一夫, 柿原稔, 谷水長丸, 佐竹亮介, 守屋智之, 辻本広紀, 上野秀樹, 橋口陽二郎, <u>長谷和生</u>	【大腸癌肝転移に対する治療のUpdate】 大腸癌肝転移に対する治療法の変遷.	外科治療	102	829-835	2011
橋口陽二郎, 上野秀樹, 神藤英二, 山本順司, <u>長谷和生</u>	大腸癌取扱い規約(第7版)とTNM分類(第7版)の比較.	日本臨床	69	237-241	2011
上野秀樹, 橋口陽二郎, 神藤英二, 望月英隆, <u>長谷和生</u>	早期大腸癌に対する治療戦略の要点(手術適応を中心に).	日本臨床	69	237-241	2011

山本順司, 初瀬一夫, 上野秀樹, 橋口陽二郎, <u>長谷和生</u> .	大腸癌肝転移に対する手術治療(手術適応). 日本臨床	日本臨床	69	396-399	2011
<u>長谷和生</u> , 上野秀樹, 神藤英二, 橋口陽二郎, 望月英隆	T1下部直腸癌の治療戦略 ハイリスク因子の同定と縮小手術の可能性	日本臨床	69	381-385	2011
上野秀樹, 橋口陽二郎, 神藤英二, 内藤善久, 望月英隆, <u>長谷和生</u>	大腸癌治療ガイドライン2009に残された課題	胃と腸	46	1449-1452	2011
Ueno H, Kajiwara Y, Shimazaki H, Shinto E, Hashiguchi Y, Nakanishi K, Maekawa K, Katsurada Y, Nakamura T, Mochizuki H, Yamamoto J, <u>Hase K</u>	New criteria for histological grading of colorectal cancer.	Am J Surg Pathol	361	193-201	2012
野津聡, 西村洋治, <u>八岡利昌</u>	CT コロノグラフィにおける鎮痙剤の必要性と体位変換の方向	日本大腸検査学会雑誌	28(2)	22-26	2011
<u>八岡利昌</u> , 西村洋治, 坂本裕彦, 田中洋一, 山口研成	直腸癌術後傍大動脈リンパ節再発に対して FOLFIRI 療法が奏功した1例	癌と化学療法	38(12)	2057-2059	2011

Tsujinaka S, <u>Konishi F</u>	Drain vs No Drain After Colorectal Surgery.	Indian Journal of Surgical Oncology	2(1)	3-8	2011
Yamamoto H, Sekimoto M, Oya M, Yamamoto N, <u>Konishi F</u> , Sasaki J, Yamada S, Taniyama K, Tomonaga H, Tsujimoto M, Akamatsu H, Yanagisawa A, Sakakura C, Kato Y, Matsuura N	OSNA-Based novel molecular testing for lymph node metastases in colorectal cancer patients:Results from a multicenter clinical performance study in Japan	Annals of Surgical Oncology	18	1891-1898	2011
Shiomi A, Ito M, <u>Saito N</u> , Ohue M, Hirai T, Kubo Y, Moriya Y.	Diverting stoma in rectal cancer surgery. A retrospective study of 329 patients from Japanese cancer centers.	Int J Colorectal Dis	26	79-87	2011
Yoneyama Y, Ito M, Sugitou M, Kobayashi A, Nishizawa Y, <u>Saito N</u> .	Postoperative Lymphocyte Percentage Influences the Long-term Disease-free Survival Following a Resection for Colorectal Carcinoma.	Jpn J Clin Oncol	41(3)	343-347	2011

Watanabe K, <u>Saito N</u> , Sugito M, Ito M, Kobayashi A, Nishizawa Y.	Predictive factors for pulmonary metastases after curative resection of rectal cancer without preoperative chemoradiotherapy.	Dis Colon Rectum	54(8)	989-998	2011
Kobayashi S, Ito M, Sugito M, Kobayashi A, Nishizawa Y, <u>Saito N</u> .	Association between incisional surgical site infection and the type of skin closure after stoma closure.	Surg Today	41(7)	941-945	2011
Shirouzu K, Akagi Y, Fujita S, Ueno H, Takii Y, Komori K, Ito M, Sugihara K; <u>Japanese Society for Cancer of the Colon and Rectum (JSCCR) on Clinical Significance of the Mesorectal Extension of Rectal Cancer.</u>	Clinical significance of the mesorectal extension of rectal cancer: a Japanese multi-institutional study.	Ann Surg.	543 (4)	704-710	2011
Nishizawa Y, Fujii S, <u>Saito N</u> , Ito M, Ochiai A, Sugito M, Kobayashi A, Nishizawa Y.	The association between anal function and neural degeneration after preoperative chemoradiotherapy followed by intersphincteric resection.	Dis Colon & Rectum	54 (11)	1423-1429	2011

Shiomi A, Ito M, <u>Saito N</u> , Hirai T, Ohue M, Kubo Y, Takii Y, Sudo T.	The indications for a diverting stoma in low anterior resection for rectal cancer.: a prospective multicentre study of 222 patients from Japanese cancer centers.	Colorectal Dis.	13(12)	1384-1389	2011
Nishizawa Y, Ito M, <u>Saito N</u> , Suzuki T, Sugito M, Tanaka T.	Male sexual dysfunction after rectal cancer surgery.	Int J Colorectal Dis	26 (12)	1541-1548	2011
西澤祐吏、伊藤雅昭、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、齋藤典男、	直腸癌に対する腹腔鏡下前方切除における助手の役割	日鏡外会誌	16	125-130	2011
<u>齋藤典男</u> 、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、	下部直腸癌に対する周術期（術前・術後）化学放射線療法の有用性、大腸癌－最新の研究の動向－、VIII. 大腸癌の治療戦略放射線療法	日本臨床	69(3)	500-504	2011
<u>齋藤典男</u> 、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、	直腸癌に対する低位前方切除、	手術	65(6)	905-912	2011,
<u>齋藤典男</u> 、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、杉藤正典、	直腸癌に対する肛門温存手術	日外会誌	112 (5)	318-324	2011

<p>滝口伸浩, 永田松夫, 鍋谷圭宏, 池田篤, 貝沼修, 早田浩明, 趙明浩, 太田拓巳, 朴成進, 岩瀬俊明, 柳橋浩男, 有光秀仁, 山本宏</p>	<p>S-1+CDDPによる胃癌 Neoadjuvant chemotherapy の治療意義 1コース施行群と2コース以上施行群の比較</p>	<p>癌の臨床</p>	<p>57巻1号</p>	<p>13-17</p>	<p>2011</p>
<p>Cho A, Yamamoto H, Kainuma O, Ota T, Park S, Ikeda A, Souda H, Nabeya Y, <u>Takiguchi N</u>, Nagata M.</p>	<p>Purelaparoscopic distal pancreatectomy with en bloc celiac axis resection.</p>	<p>J Laparoendosc Adv Surg Tech A.</p>	<p>21</p>	<p>957-9</p>	<p>2011</p>
<p>Shitara K, Morita S, Fujitani K, Kadowaki S, <u>Takiguchi N</u>, Hirabayashi N, Takahashi M, Takagi M, Tokunaga Y, Fukushima R, Munakata Y, Nishikawa K, Takagane A, Tanaka T, Sekishita Y, Sakamoto J, Tsuburaya A.</p>	<p>Combination chemotherapy with S-1 plus cisplatin for gastric cancer that recurs after adjuvant chemotherapy with S-1: multi-institutional retrospective analysis.</p>	<p>Gastric Cancer</p>		<p>Epub ahead of print</p>	<p>2011</p>